

## 全国納税貯蓄組合連合会優秀賞

### 一〇〇〇年前の「卑弥呼」の時代から

### 一〇〇〇年先の未来まで

長岡市立北中学校

三年 小玉 夢乃

「行ってきまーす。」また今日も平凡な一日が始まった。だが、この平凡な毎日がどれだけ尊い物なのか、この夏、知ることになった。この作文をきっかけに税というものを調べていく中でまず、「税金」というしくみはいったいつから始まったのだろうか。それが最初の疑問だった。税金の歴史をひもといていくと遠い昔、もう千年以上も前の日本に「邪馬台国」という国があつて「卑弥呼」という女王が国を治めていた時代から始まったとある。もちろん「邪馬台国」も「卑弥呼」も聞きなれた名なので急に親近感を覚えた。当時は人々が食糧や絹織物などを年貢として納めた物が日本の税の出発点と考えられていて、その後は時代によって求められる税のあり方も形も変化をしたと思うけれど、千年以上も前から今も続いているのにはきつと訳があると率直に思った。なぜなら、実際に国民の税金に対するイメージは決してよいものではないと推測されるからだ。私自身もこれまでは、税金のゆくえというものを真面目に考えた事がなく、何か買い物をしても必要以上に払っているのではないだろうかときえ思っていたからだ。この機会に両親に税の事について尋ねると税金には約50もの種

類があることがわかり自分が思っていた以上にたくさんあつて驚いた。そしてすべてが安心して暮らすために大切な役割を果たしていた。朝、水道をひねればキレイに浄化された水がいくらでも出て、その水で顔を洗い、料理を作り食べる。そして安全の為に整備された道路を歩き登校し学校で平等に教育を受ける事ができている。病気や怪我の医療費、毎日、大量に出されるゴミの回収。市民の安全安心のための警備体制。言うまでもなくどれも今の豊かな日本の生活には欠く事のできない制度だ。すべてあたりまえのように感じていたが、最近この「あたりまえ」がいつまで続くのか不安になったりもしていた。世界的に大流行したコロナウイルス。その他にも毎年のように日本各地で自然災害が発生し、その都度、国の予算から税金が使われている。今この瞬間でも世界では戦争が行われており、もし日本も巻き込まれたらと考えると資源のないこの国の行く末はいったいどうなるのだろうか。資源に限りがあるように当然、税金にも限りがある。自分の為でなく同じ日本という国に住む誰かのために、私達の両親、祖父母の時代、それよりもっと前からつないでくれた税金という思いやりのバトンのおかげで今、現代を生きる私たちが不自由のない生活ができているのだ。そんなみんなの思いやりを無駄にしてはいないだろうか。中学生の私達でもできることはないだろうか。これからは、きちんと大切にに使わせてもらわなければという思いと私も、大人になったら、未来の人達の為に役割を果たす次につないでいきたいと強く思った。この日本の未来が明るいものになるように願いながら。